

中国語文（国語）教育事情 —中華人民共和国教育部「普通高中語文課程標準（実験）」（2003年）の紹介—

大野早苗・莊嚴

要旨

本稿では、中国からの留学生が母国で受けてきた語文（国語）教育がどのようなものかを知るために、「普通高中語文課程標準（実験）」（2003年）の前書きと教科の目標を邦訳し、紹介する。この課程標準には、語文の工具性、すなわち思想伝達のための道具としての性質と、人文性、すなわち教養としての位置づけの双方に言及がある。また、読み書きに関する教育の数値目標が挙げられるなどの特徴も見られる。

キーワード

中国、課程標準、高級中学、語文教育

1. はじめに

大学における留学生を対象とした日本語教育では、彼らが母国でどのような国語教育を受けてきたかを知ることが重要である。読み書きや議論をどのように、何を重視して行うかには、国語教育の影響があると思われるからである。

中国からの留学生に目を向けてみると、大野・莊（2016）が指摘するように、留学生自身が母国の学校で学んできた書き方、つまり、古典や名句からの引用を重視し、表現に技巧を凝らした書き方が必ずしも日本では高い評価を受けないことに気づき、困惑するケースもあるようである。

中国では、学校教育の内容、基準などが課程標準（日本の学習指導要領にあたる）によって定められている。語文（日本でいう国語）教育については、義務教育レベル（小学校と日本の中学校にあたる初級中学）の課程標準は邦訳もされており、その段階の語文教育の概要を知ることができる（2003年版は三野 2008、2011年版は李・陳 2013 参照）。ところが、日本でいう高校レベルの語文教育については、日本ではあまり議論がなされておらず、課程標準がどのようなものかも詳細にわかっていない。

そこで、本稿では、まず、高校レベルでの語文教育の目標と概略を知るために、2003年の「普通高中語文課程標準（実験）」から、「第一部分 前書き」と「第二部分 教科の目標」を邦訳し、資料として紹介することとした（ただし、紙幅の都合上、第二部分の選択科目に関する記述は省略した）。中国における高校レベルの学校には、普通教育を行う普通高級中学、職業訓練を行う中等職業学校などがあるが、「普通高中語文課程標準（実験）」は、普通高級中学における教育について定めたものである。この課程標準は、2017年12月発布、2018年秋から実施予定の「普通高中語文課程標準」（2017年版）まで使われており、2018年現在の留学生のほとんどは、これにより高級中学での語文教育を受けたことになる。

なお、「普通高中語文課程標準（実験）」の構成は、次のとおりである。

第一部分 前書き

- 一、教科の性質
- 二、教科の基本的理念
- 三、教科設計の筋道

第二部分 教科の目標

- 一、必修科目
- 二、選択科目

第三部分 実施についての提案

- 一、指導に関する提案
- 二、評価に関する提案
- 三、教科書編集に関する提案
- 四、教科資源の利用と開発

附録

2. 普通高中課程標準について

中国では、学校教育の指針を 1929 年代から「課程標準」、1950 年代以降は「教学大綱」により定めていたが、2000 年代以降、「課程標準」により定められることとなった。普通高級中学について言えば、2002 年にそれまでの教学大綱の改訂版が出されたが、2003 年には、より時代に即したものとして「普通高中語文課程標準（実験）」が定められた。この背景には、1990 年には中国全土で 700 万人余りであった普通高級中学への進学者が 2000 年には 1200 万人を超え、その後も年々、大幅に増加し続けていることによる教育の大衆化がある⁽¹⁾。郭（2004、p.13）が指摘するように、従来、普通高級中学はエリート教育的な意味合いが強かったが、生徒全体の言語に関する知識や教養の向上を目指すことが急務となったのである。2002 年の教学大綱と 2003 年の課程標準は併存し、漸次、修正を加えつつ、課程標準へと移行していった（国立教育政策研究所 2009、p.58）。

「普通高中語文課程標準（実験）」の特徴としては、まず、「第一部分 前書き」の「一、教科の性質」で、語文工具観（成實 2009 参照）と、人文主義の双方が見られることが挙げられる。中国の語文教育には、工具性⁽²⁾、すなわち、言語を工具（道具、手段）と見なして、それをを用いてイデオロギーを広めようとする側面と、人文性、すなわち人文科学的な教養を身に付けさせようとする側面とがあり、時代によってその比重が揺れているようである（成實 2002、王・曹 2000、耿 2009 など）。この課程標準は、その両面を含むものであり、異なる二つの主張の双方に配慮したものであると言えよう。工具性について言えば、義務教育の課程標準とも共通することであるが、「第二部分 教科の目標」の「読書と鑑賞」10、「表現と交流」6 に見られるように、読むこと（読書）にも書くこと（表現）にも数値を示した目標が定められていることが注目される。中国における読み書きの教育、中でも書くことの教育の重視はしばしば指摘されるが（森山・呂 2009 など）、数値目標を提示することにより、読み書きの教育の徹底が図られ、工具としての語文能力の習得が目指されているものと思われる。一方、人文性について言えば、「第二部分 教科の目標」として古典、経典となるべき名著などを学ぶことへの言及があり、また、全体を通して様々なものから美を感じ取る審美の力を身につけることが繰り返し述べられてい

る。教養として、古典を含む文学作品などについての知識とそれを鑑賞する能力が重視されるということであろう。

3. 課題

1 節で大野・莊 (2016) を引いて中国からの留学生が日中の文章表現の規範の違いについて覚える困惑について触れたが、これは、工具性と人文性の双方を重視する中国の語文教育と、日本でよしとされる文章表現のあり方の違いに関係するとも考えられる。工具性の現れとして読み書きの教育が徹底され、人文性の現れとして人文科学的な教養が重視されるとすれば、よく書くこととは、すなわち、古典を含む文学などの知識を織り込みつつ表現に工夫を凝らして書くということになるだろう。これは、日本の学校教育における書くこととは目指すところが異なりそうである⁽³⁾。本稿は、課程標準の紹介にとどまるが、留学生が語文について何を学んできたか、つまり、読むことと書くこと、聞くことと話すことの基礎として何を身に付けているかを知るためには、教科書のあり方、授業の実態などにも目を向ける必要がある。さらに、母国で身に付けたものが日本でどのようにならに影響するかを考えていかなければならないだろう。

また、上述のように、2017 年には「普通高中語文課程標準 (2017 年版)」が制定されている。そこでは、指導思想として、毛沢東思想や鄧小平理論、習近平新時代中国特色社会主義思想ほかを加えられ、また、学習任務群としてより詳細な記述があり、量的にも倍増するなど、2003 年のものから変化が見られる。変化の詳細を把握し、それがどのように学生に影響するのかを検討することも今後の課題である。

(大野早苗おののさなえ・順天堂大学)

(莊嚴じゅあんいえん・秀明大学)

付記

本研究は、JSPS 科研費 JP16K02822 の助成を受けた研究の成果の一部である。

注

1. データは中華人民共和国教育部 HP による (<http://old.moe.gov.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/s8493/201412/181722.html> 2018 年 5 月 1 日参照)。
2. 「工具性」は、「道具性」、「ツール性」などと訳される場合もある。
3. 日本の学習指導要領では、高等学校国語の必修科目である国語総合における書くことの指導事項として、題材を選び、表現を工夫して書く、論理の構成や展開を工夫して書く、適切な表現の仕方を考えて書くなどが挙げられる。

参考文献

- 大野早苗・莊嚴 (2016) 「インタビュー調査からみる中国人留学生が母国の学校教育で学んだ文章の書き方について—一作文参考書の利用を中心として—」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』8, 74-82.
- 国立教育政策研究所 (2009) 『第 3 期科学技術基本計画のフォローアップ「理数教育部分」』

に係る調査研究：『理数教科書に関する国際比較調査結果報告』国立教育政策研究所
成實朋子（2002）「1990年代の中国国語教育研究—1996年「高級中学語文教学大綱」を中心」『学大国文』45, 111-133.

成實朋子（2009）「中国の国語教育の昨日・今日・明日—求められる「教養」とは—」『中国児童文学』19, 30-44.

三野園子（2008）「中国の語文教育—語文課程標準を基礎資料として—」『アジア社会文化研究』9, 49-74.

森山卓郎・呂曉東（2009）「中国における作文指導—中学校を中心に—」『京都大学国文学会誌』35, 64-82.

李艶・陳紫琪（2013）「中国国語教育政策研究—中華人民共和国教育部制定「義務教育課程標準（2011年版）」翻訳と考察」『横浜国大語文教育研究』38, 54-71.

耿紅衛（2009）『革故与鼎新：科学主义视野下的中国近现代语文教育改革研究』山東教育出版社

郭根福（2004）『课程标准与教学大纲对比分析—高中语文』东北师范大学出版社

王柏勳・曹洪順（2000）「中学語文教学大綱 50 年的變遷」『語文教学通讯』第 18 期, 7-8.

資料

「普通高中語文課程標準（実験）」抄訳

第一部分 前書き

普通高級中学教育は大衆に向けた、九年間義務教育と接続した基礎教育である。社会の発展によって我が国の高級中学教育は新たな要請を受けている。時代の要請に応えるべく、教科の内容と目標を調整し、学習方法と評価方法を変革し、時代性、基礎性と選択性を持った高級中学語文教科を構築することが、基礎教育改革の重要な任務の一つである。

高級中学の語文教科の構築は、マルクス主義と教育科学の理論の指導の下で、義務教育における語文教科改革の基礎の上で、更に推進されるべきである。高級中学の語文教科は、生徒の発達を促進するための独自の機能を十分に発揮し、高級中学の生徒全員に持つべき語文的素養を持たせると同時に、生徒それぞれの異なる発達傾向にさらなる学習の余地を提供して、時代に求められる多方面の人材の育成、民族精神の発揚と育成、民族の創造力と団結力の増強にしかるべき役割を果たさなければならない。

一、教科の性質

語文は最も重要な交流工具であり、人類の文化の重要な構成部分である。工具性と人文性の統一が語文の基本的な特徴である。高級中学の語文教科は、生徒の語文素養をさらに向上させ、生徒にしっかりとした語文応用力と一定の語文審美能力、探究能力を身につけさせ、良好な思想・道徳の資質と科学・文化の資質を形成させて、生涯学習と個性的発達のための基礎作りをする。

二、教科の基本的理念

高級中学語文教科を構築するには、『全日制義務教育語文課程標準（実験）』で唱えられた基本的理念を堅持し続け、新しい時代における高級中学語文教育の任務と生徒のニーズに基づいて、「知識と能力」、「過程と方法」、「感情・態度と価値観」の三つの方面から教科目標を定め、内容、構造と実施の仕組みを努めて改革すべきである。

（一）生徒の語文的素養全般を向上させ、語文教科の人間育成の機能を十分に発揮する。

高級中学の語文教科は、生徒の一定の語文的素養全般の獲得を助け、将来にわたる学習、生活と仕事のニーズに応えるべく、発展を継続し、絶えることなく向上し続けつつ、役割を有効に発揮すべきである。

高級中学の語文教科はその特長を発揮して、民族精神を発揚し育成し、生徒が優れた文化に感化されることを促し、祖国と中華文明に対する熱烈な愛情と、人類の進歩的事業に献身する精神、品格を確立させ、健康で美しい感情と向上心のある態度を形成させる、また、教科内容と生徒の成長との連繫を増進して、実践活動に積極的に参加し、自然や社会、さらに自身を認識して人生の計画を立てるよう生徒を導き、人間の発達全般における本教科の価値の追求を実現すべきである。

（二）語文における応用、審美、探求の能力の育成を重視し、学生のバランスの取れた、かつ、個性的な発展を促す。

高級中学の語文教科は、現実の暮らしと生徒個人の発達のニーズに応えるために、応用を重視し、社会の発展、科学技術の進歩との連繫、他の教科との疎通を強化すべきである。生徒に言語コミュニケーションの規範と基本的な能力を身につけさせるとともに、語文の応用を通じて責任感と、事実に基づいて真実を追求する科学的態度を身につけさせなければならない。

審美の教育は知、情、意全般の発達に有益である。文学芸術の鑑賞と創作は重要な審美活動であり、科学技術における創造、発明および社会生活の多くの面でも審美的な追求がその中を貫いている。将来の社会では、さらに美の発見、追求と創造が重視されるようになる。語文には審美を教育するという重要な機能があり、高級中学の語文は生徒の情緒の発達を見守り、美に感化されることを促して、能動的な審美意識と品位のある審美的情緒を養い、美に対する感受性と審美的創造の能力を養うべきである。

現代社会では、鋭い思想と探索精神と創造力を持ち、自然、社会と人生についてより深い思索と認識を持つことが求められている。高級中学の生徒は心身の発展がいよいよ成熟に近づいて、一定の読書・表現能力と知識・文化の蓄積をすでに持っており、その探求能力の発展の促進は、高級中学の語文教科の重要な任務となる。生徒の観察、感知、分析、判断の能力をさらに向上させると同時に、彼らの思考の深さと広さを重点的に意識して、探究への意識と興味とを強化して探究の方法を学習させ、語文学習の過程が積極的、能動的に未知の領域を探索する過程となるようにするべきである。

（三）共通基礎と多様な選択の共存の原則に従い、開放的で秩序ある語文教科を構築する。

高中語文教科は共通基礎と多様な選択の共存という原則に従って、必要な語文的素養を生徒一人一人に獲得させるべく学習内容を精選し、学習方法を変革すべきである。同時に、よりよい学習環境とより広い成長の舞台をすべての生徒に提供し、生徒の得意分野と

個性の発展を促進すべく、もともと持っている素地や個人の進路と学習面のニーズなどにおける差異にも配慮して、生徒の興味と潜在能力を刺激し、科目の選択性を強めなければならない。

高中語文教科は相対的に安定した構成系統を持ちつつ、弾力的な実施の仕組みを持つべきである。学校は課程標準に基づいて、教科を選択的、創造的に設計して実施し、教員がレベルを高めて得意分野を生かし、各種の教育資源を開発・利用し、資源を共同利用するネットワークを構築し、開放的で多様で秩序のある語文教科体系を作りあげるよう助けるものとする。

三、教科設計の筋道

(一) 高中教育の発展の趨勢、人材の多様化に対する社会のニーズと語文教育に対する生徒の多様な期待に応えるために、高中語文教育は、時代性、基礎性と選択性を体現し、義務教育を基礎として、生徒全体の語文的素養を更に向上させると同時に、個々に異なるニーズを持つ生徒の大きな成長の舞台を提供しなければならない。そのため、高中語文教科の新しい構成体系と実施の仕組みの構築が求められている。

(二) 高校語文教科は必修科目と選択科目の双方を含む。科目構成図は以下のとおりである。

[図省略]

(三) 必修科目においては教科の基礎の形成とバランスの取れた発展を重視すべきである。必修科目の学習を通して、生徒は良好な思想的文化的修養としっかりとした言語文字の運用能力を身に付け、語文の応用、審美と探求などの面においてバランスの取れた発展を遂げることが望ましい。選択科目も基礎の形成を体現すべきであるが、生徒に対して、選択的に学習させ、個性的な発展を促すことのほうにより力を入れるべきである。

(四) 必修と選択は学習内容をブロック（訳者注：目標、レベルに応じた学習内容の区分）にまとめ、各ブロックには 36 時間、2 単位をあてる。毎学期（訳者注：中国では 2 学期制を取っている）を 2 ターム（訳者注：学期をさらに分けた時間的区分）に分け、各ターム（約 10 週間）で 1 ブロックの学習を完成とする。このような設計は、学校が科目を柔軟に配置すること、さらに、生徒の多様な学習面のニーズを満たし、生徒が自らの実情に合わせて特定のブロックの内容を選択して学習したり、学びなおしたりするのに有益である。

(五) 必修科目は「読書と鑑賞」、「表現と交流」の二つの目標を含み、「語文 1」から「語文 5」までの五つに区分される。各区分は総合的なもので、「読書と鑑賞」、「表現と交流」の目標と内容を体現する。この五つの区分は高一から高二までの 2.5 学期で順を追って漸次、完成してもよく、必要に応じて柔軟に配置してもよい。

(六) 選択科目には五つの系列を設ける。系列 1 は詩歌と随筆、系列 2 は小説と芝居、系列 3 はニュース記事と伝記、系列 4 は言語文字の応用、系列 5 は文化に関する論著の講読である。各系列をいくつかに区分してもよい。学校は、各系列の目標に合わせて、自校の教科リソースと生徒のニーズに鑑みて、柔軟に区分を設けて選択科目を開設することが望ましい。区分ごとの内容的な組み合わせ、および区分間の配列順については、各校が実情に合わせて柔軟に実施できる。科目の具体的な名称も学校が決めてよい。

(七) 生徒は必修科目の 10 単位を取得すれば、この教科の基本的な学業を修め、高中段階の最低基準に達したとみなされる。生徒に対して、自らの興味や将来の学業、および目標とする職業に応じて、関係の科目を履修するよう推奨すべきである。さらに勉強を続けたい生徒には、選択科目の 5 系列の中から任意に 4 区分を選択して履修し、8 単位を取得して、必修科目の 10 単位と合わせて、計 18 単位を取得することを薦める。学習意欲が強く、さらに学習を深めたい生徒には、この上で 5 系列からさらに任意の 3 区分を履修して 24 単位を取得することを薦める。

第二部分 教科の目標

高中語文の必修科目と選択科目の学習を通して、生徒は以下の五つの面において発達することが望ましい。

蓄積・整合

選んだ目標に向かって、語文を整理することに留意しながら、蓄積に努める。自らの特徴に基づいて長所を生かし短所を補い、個性的な語文学習方法を徐々に形成する。また、学習方法の多様性を知って語文学習の基本的方法をつかみ、読書や交流の中で発見した問題を必要に応じて適当な方法で解決できる。語文の知識、能力、学習法、および情緒、態度、価値観などの要素を融合し整合することを通して、語文的素養を確実に向上させる。

感受・鑑賞

優れた作品を読み、言葉を味わい、その思想的、芸術的魅力を感じ取り、想像力と審美力をはぐくむ。良好な現代中国語の語感を持ち、古典の詩文に対する感受性の向上に努める。読むことを通して、大自然と人生の豊かさを体感し、自然を大切にし、生活を愛する感情をはぐくむ。また、芸術と科学の中にある美しさを感じ取り、審美の領域を高める。読書と鑑賞を通して、祖国の言語を愛する感情を深め、中華民族の文化の広さと深さ、歴史の長さを深く理解し、情緒を育て、品格のある情趣を身につけることを目指し、道徳的修養を高める。

思考・理解

自らの学習目標に合わせて、経典となるべき名著とその他の優れた読み物を読み、テキストとの対話を展開する。読み、かつ考えることで、その豊かな内容を深く理解し、人生の価値と時代の精神を探り、それを通して、自己の思想、行動の基準を形成し、積極的に上を目指すような人生の理想を立て、民族の振興のために努力するという使命感と社会的責任感を強化する。自分で考え、問いかけて答えを求める習慣を養い、厳密で奥深い、批判的思考力を育成する。他者と交流して、時に異なる思想の衝突を楽しみ、互いに切磋琢磨する中で、理解を深め、ともに向上する。

応用・発展

生活や他の学習領域の中で祖国の言語文字を正しく、熟練したやり方で、効果的に運用できる。語文の応用において、視野を広げて、まず自らの語文学習における潜在的な能力と傾向を知り、必要と可能性に応じて、自らが好む領域で成長する。文化に対する意識を強化し、人類の文化遺産の伝承を重視して、多元的な文化を尊重し理解し、現代の文化に関心を持ち、文化的現象を分析することを学び、先進的な文化の伝播と交流に積極的に関わ

る。分野横断的な学習を重視し、語文学習の範囲を開拓して、広範な実践を通して語文の総合的な応用能力を向上する。

発見・創造

言語、文学と国内外の文化的現象を観察するよう留意し、よく知っている事実や過程の中に問題を発見することを学び、探求意識を持って敏感に問題を発見できるようになる。未知の世界に常に強い興味と情熱を持ち、新しさを追求する勇気を持って、新しい学習領域に入り、新しい方法を試み、新しい思考と表現を追求する。多角的、多次的に読むことを学び、優れた作品を読み直すたびに新しい体験と発見をすることができる。また、歴史的な視点と現代的な観念をもって古典の作品の内容と思想の傾向を見つめ、自らの見方を述べることができる。探究活動においては、自分の見解を勇気をもって示すと同時に、他人の成果を尊重し、探求能力を不断に高めて、厳密で、真実を求める学問に対する態度を徐々に養っていく。

一、必修科目

読書と鑑賞

1. 読書と鑑賞の活動では、常に精神生活を充実させ、自らの人格を完成し、人生の領域を向上させ、個人と国家、個人と社会、個人と自然の関係に対する思考と認識を徐々に深めていく。
2. 独力で読書する能力を伸ばす。テキスト全体の内容を把握し、筋道を整理し、要点をまとめて、テキストの表す思想、観点と感情を理解する。問題を発見して、指摘でき、テキストに対して自らの分析、判断を行って、異なる視点と次元から説明し、評価や問いかけをするよう努力する。文脈から語句の意味を推測し、学んだ語文知識を用いて、構造が複雑で多義的な語句の理解を助け、適切で効果的かつ印象的な語句で表現する力を身につける。
3. 個性を生かした読書を重視し、自らの生活の経験と知識の蓄積を十分に生かして、能動的で積極的な思考と感情の活動の中で独自の感受性と体験を得る。探究的、創造的に読むことを学び、想像する力、筋道を立てて考える力と批判する力を伸ばさせる。
4. 論理、実用、文学など様々なテキストが読めるようになる。目的や材料に応じて、精読、大意読み、拾い読み、速読などの読み方を柔軟に運用して読む効率を高める。
5. 普通話（訳者注：標準語）で流暢に朗読し、テキストの思想、感情と自らの読み取りを適切に表現できる。
6. 国内外の文学作品を観賞することを学び、積極的な鑑賞態度を持って、体験的に審美を学び、情操を豊かにして心を育てることを心がける。人物像を理解し、言語を味わい、作品の豊かな中身とその芸術的な表現力を深く理解して自らの感情的体験と思考を持つ。作品に込められた民族の心理と時代の精神を探索し、人類の豊かな社会生活と感情世界を知るよう努力する。
7. 読書、鑑賞において、詩歌、随筆、小説、芝居などの文学形式の基本的特徴および主な表現手法を知り、作品の分析と理解に役立つべく関連のある背景素材を知る。
8. 中国古典の優れた作品に学び、そこに込められた中華民族の精神を深く理解し、伝統文化に対する一定の知識を得るための基礎をつくる。歴史発展の視点から古典文学の内

容、価値を理解し、民族の知恵を学び取る。また、現代的な観念で作品を見つめ、その積極的な意義と歴史的限界を評価する。

9. 易しい文言（訳者注：文語）文を読み、注釈と辞典類を用いて語句の意味を理解し、文章の内容を理解する。常用の文言内容語と文言機能語、文言文の文型の意味や用法を知って、整理し、読むことの実践の中でその使われ方を類推する。古典の詩や長短句と文言文を朗読し、一定数量の名文を暗唱する（附録一の「読誦する詩文と課外読み物に関する提案」を参考）。

10. 広く読む興味を持ち、読む視野を広げるよう努める。読む材料を正しく能動的に選び、よい本を選んで通読して、自らの精神を豊かにし、文化的品位を向上させるようにする。課外で文学名著（5本以上）、およびその他の読み物を自主的に読み、総量は150万字以上とする（附録一の「読誦する詩文と課外読み物に関する提案」を参考）。

11. 協力して学習することを心掛け、互いに切磋琢磨する習慣を養う。自らの読書、鑑賞の感想を他者と交換し、読書成果を発表することを楽しむ。

12. 語文の辞書類を使いこなし、多様な媒体で情報を集め、利用する。

表現と交流

1. 生活を多角的に観察し、生活の経験と感情の経験を豊かにし、自然、社会と人生について独自の感受性と思考を持つ。

2. 目的に応じて、責任ある態度で自らの意見を述べ、真実な感情を表現し、科学的で理性的な精神を培う。

3. 文章表現に際しては、観点を明確にして内容を充実させ、偽りのない健全な感情と明確で一貫性のある考えについて、主旨にそって内容を取捨選択して適切な構成で書く。表現の実践の中で、具体的思考、論理的思考と創造的思考を発達させる。

4. 個性的で創意ある表現を目指し、個人の得意分野と興味関心に合わせて自ら作文を書く。生活、学習の中で素材を多面的に蓄積し、多く考え、多く書き、感想を持って表現をする。

5. 叙述、説明、描写、議論、抒情などの基本的な表現能力をさらに向上させ、多様な表現方法を使うよう意識する。自らの言葉の蓄積を動員して推敲し、言葉を磨いて、正確で、鮮明な、生き生きした表現を目指す。

6. 文章を自力で修正し、学んだ語文の知識を生かして多く書き、多く修正し、切磋琢磨の習慣を養う。互いに作品を示し合い、評価し合うことを進んで行う。45分間で600字程度の文章を書き、課外の作文練習を2万字以上する。

7. コミュニケーション能力を強化し、口頭コミュニケーションに自信を持ち、他者を尊重して礼儀正しい話し方をし、落ち着いた態度をとり、相手の言葉に耳を傾け、素早く応対する。

8. 口頭表現の特徴に注意して、場合と目的に応じて適切に表現する。語調、語気、表情と身振りをを用いて、口頭コミュニケーションの効果を上げる。

9. 観点を明確にして、十分な材料を持って、生き生きと、説得力と影響力を持つようにスピーチができる。討論または弁論において積極的、能動的に発言し、適切に対応したり反駁したりする。文学作品を朗読し、一定の影響力を持つように、正しく作品の内容を把握し、その思想の内容と感情を伝達する。

二、選択科目

（以下、省略）